国語科教育における作文評価の項目設定と手法の設計

◎齋藤ひろみ（東京学芸大学教職大学院教育実践創成講座）
〇白勢彩子（東京学芸大学日本語日本文学研究講座日本語学分野）
中村和弘　（東京学芸大学日本語日本文学研究講座国語科教育分野）
大澤千恵子（東京学芸大学日本語日本文学研究講座国語科教育分野）
成家雅史（東京学芸大学附属小金井小学校）
細井宏一（東京学芸大学附属大泉小学校）
土屋晴裕（東京学芸大学附属大泉小学校）
菅原雅枝（東京学芸大学国際教育センター）
笹島眞実（国立教育政策研究所）
工藤聖子（東京学芸大学教育学研究科修了生）
共同研究者：安部真治（東京学芸大学教職大学院院生）
代表者連絡先：shiromi@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】
作文評価　内容的観点　計量的観点　評価システム　「書くこと」指導

1　はじめに

本研究プロジェクトは，小学校国語科の「書くこと」領域における作文指導の評価項目・手法を，実証的かつ実践的に構築することを目的として，平成 30～令和元年度に実施した。

小学校の新学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）の国語科では内容構成が変更され，「書くこと」においても思考力，判断力，表現力等の育成が求められている。自己の内的省察から思考を深め，それらを適切な言語を用いて表象し，相手に伝えることで相互交流が可能となるような表現力を養うことが必要となった。児童の「書く」力に関しては，全国学力・学習状況調査の結果から課題があることが指摘され，外国人児童などリテラシーに困難さのある児童への対応等，「書くこと」指導は多様化し，柔軟な評価が求められるようになってきてもいる。また，公立小学校では若手教員が増え，「書くこと」の指導や評価に苦手意識があるとの傾向が指摘されてきている。こうした中，小学校においては2020年4月から新学習指導要領の全面導入が始まるのである。前述の現状を踏まえ，教育現場の「書くこと」指導に資する児童作文の評価項目や方法の確立は急務である。加えて，こうして開発した評価システムは，教員を志す教職課程の学生が，作文を的確に評価するための観点と方法を知り，評価に基づいた指導の重要性を学ぶ上でも活用が可能であり，小学校の「書くこと」指導の課題を解決する一つの方途となる可能性をもつ。

しかしながら，従来，児童作文を評価する項目や手法は明示的でない。この背景には，児童作文に関わる基礎的な研究が限られているために実践的に扱うことが難しい現状や，さらに，教育実践と基礎研究の立場に認識の相違があるために成果の統合に難しさがあり，研究が進展しにくかったことがあると考えられる。児童の作文の力に関する大規模な基礎的データを取った調査研究の代表

的なものとして，国立国語研究所（1964）の作文スキルの発達に関する調査研究が挙げられる。内容・計量・形式の側面からの，多角的な考察がなされ，学年による発達の様相も把握することができる。以降，語彙量など計量的な特徴に関する研究が多くなされてきているものの（江本，1980；野村・鬣岡，1986；石井，1996 など），構造的な特徴についての研究は少なく，土部・宝示（1966）など，限られているようである。近年では，阿部・他（2019）の研究があり，指導要領の改訂に対応し，指導法の開発や作文コーパスなども活用されるようになってきている。

我々は，教科実践を専門とする小学校教員と，実践研究・基礎研究に携わる研究者が協働して，児童作文を多面的に解析し，新たに，実践的かつ実証的に作文評価システムを提案することをねらいとして研究プロジェクトを推進してきた（土屋・他，2019；白勢・他，2020）。

２　本プロジェクトの実施

2.1　調査研究の概要

初年度の平成 30（2019）年度においては，主に，児童作文の基本構造の明確化のための作文種収集とデータ整理，作文に基づく評価システムの試作を行なった。

児童作文の文章構成や特徴を明確とし，基本的な成り立ちを把握するため，日本語を母語とする児童の作文の調査を実施した。作文のテーマ（学校行事などの作文か，私の夢のような抽象的なテーマか）により，また教員の指導方針等により文章構成が大きく異なることから，附属大泉・小金井小学校をフィールドとして系統的に作文データを集めるよう工夫した。計 415 名の児童の作文が集積された。形態素解析システムを用い，計量的・客観的なデータ整理を中心に実施した。評価システムの試作については，初年度は評価項目および評価手法の検討に留まった。国語科教育における指標のあり方と，日本語学分野における作文の定量的な把握との相違を確認することができ，これに基づき次年度に評価項目の設定を行った。

第 2 年度にあたる令和元（2020）年度は，評価項目の整理とアウトリーチ活動に重点を置いた。評価項目の設定手続等詳細については，次節および白勢（2020，本誌掲載）で述べる。大学の教員養成科目にて，作文評価の実践を行い，本研究での知見を生かした作文指導の教育を行った。附属校においては，授業実践を提案し，本研究課題による評価システムの活用可能性を検討した。全国大学国語教育学会，社会言語科学会での発表等も行い，研究の知見を広く共有できるよう努めた。

2.2 学会における成果の報告

以下にて，成果報告を行った。

令和元年 9 月 14 日　東京学芸大学国語教育学会

口頭発表「児童作文の評価項目に関する予備的検討－紹介文に見る内容的観点と計量的観点－」

令和元年 10 月 27 日　全国大学国語教育学会第 137 回仙台大会（宮城教育大学）

口頭発表「児童作文の評価項目に関する予備的検討」（予稿集掲載 pp. 311～314）

令和 2 年 3 月 7 日　第 44 回社会言語科学会研究大会（同志社大学）

ワークショップ「児童作文の評価システムの構築－紹介文をテーマとして－」

3　成果　－作文の評価項目の構築－

3.1 作文データの収集と整理

附属大泉小学校および小金井小学校にて，児童作文を収集した。2 校で実施の手続きは同一である。作文のテーマは「あなたの学校を，知らない人に紹介してください」とし，紹介文課題を設定した。指導を行わず，児童に自由に書かせた。時間は 20 分とし，枚数や字数に制限は設けなかった。原稿用紙は通常用いているものを用いた。名前は書かせず，番号で処理した。人数の内訳を下記に示す。

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	計
附属大泉小学校	31	31	31	92	43	0	228
附属小金井小学校	34	34	32	34	27	35	196
計	65	65	63	126	70	35	424

収集した作文は誤字脱字等も含めて原文通りを原則として，パソコン上でテキスト入力し、分析した。

3.2　作文の評価項目の抽出

本研究の成果として，作文評価のための内容的観点 6 項目，量的観点 10 項目を下に示す。内容的観点は，教師の作文指導経験をもとに設定した，いわゆる印象評定の項目である。計量的観点は，従来の計量国語学の文章分析の知見をもとに設定した（詳細は本誌の白勢論文）。前者については，教師による作文評価という実践的アプローチにより，後者は作文の計量値を解析して実証的に妥当性を検討した。これら両側面の項目により，作文は多面的かつ的確に評価できると考えられる。

＜内容評価の 6 項目＞

A 課題把握：学校紹介という課題を理解し，相手意識をもって，紹介する内容として相応しい事柄を選んで述べたり読み手への呼びかけ・働きかけをしたりしているか。

B 内容記述：紹介したい事柄について，具体的な内容や特徴，紹介したい理由などを詳しく述べているか。

C 独自性：紹介する事柄について自分にとっての意味や価値が伝わるエピソードや考えが述べられているか。また，他の児童とは異なるユニークな視点で紹介する事柄を選んでいるか。

D 段落：形式段落が，内容のまとまりを備えて作られているか。（形式段落に着目）

E 一貫性：テーマを軸に，事柄の順序や関係などが，一定の見方や考え方で貫かれていたり，論理的に組み立てられていたりしているか。

F 構成：文と文のつながりが明確で，内容のまとまりがわかる構成で書かれているか。（意味段落に着目）

＜計量的観点　10 項目＞

a)総文字数（句読点，符号等含む）　b)段落数　c)文数

d)延べ語数	e)異なり語数	f)d)と e)の比	g)間違い数
h)呼びかけ表現	i)主語（「わたし{が，は}」等）の出現数		
j)所有表現（自称詞＋「の」；「わたしの」等）の出現数			

本研究の目的は，作文指導の評価項目・手法の構築である。内容的観点の 6 項目は，内容記述に関わる側面と構成スキルに関わる側面を分析的かつ構造的に捉えられるものとなった。計量的観点としては，直観的な計量が可能な項目として，ア）複文の数　イ）語彙の豊かさ　ウ）呼びかけ表現数　エ）書き手の主体性の 4 項目を提案した(白勢,2020,本誌掲載)。両側面による評価を補完的に行うことによって，作文の力の課題を可視化でき,「何をどう書いたらよいかわからない」という児童の実態に応じた指導をすることができると考えられる。つまり,「指導と評価の一体化」である。それには「評価」時のみならず,「作文指導の計画」「学習過程」の各局面において，目標を設定し，内容・活動を構成する上で,評価項目を基準または要素として利用することも有益であろう。また，これらの項目を自己評価に利用し，児童が自律的に学ぶためのシステムとして活用することも期待される。

４　課題

本研究プロジェクトは，国語科の教科実践を専門とする小学校教員と，国語科教育・日本語学・日本語教育の各研究領域で実践研究・基礎研究に携わる研究者が協働して，実践的かつ実証的に作文評価システムを提案することをねらいとして実施してきた。この種の研究においては，教科実践の教員と基礎研究を主とする教員とが連携して推進していくことが求められつつも，両者の相互連携による研究の蓄積がなされにくかった。本研究の成果は，課題の多様化が進む学校教育現場の実践に対し，また，関連領域の研究的発展に大きく寄与するものと予想され，今後，より広く知見を共有し活用できるよう努めることが必要であろう。

【参考文献】

・安部朋世・橋本修・西垣知佳子・田中佑・永田里美(2019)「児童・生徒の作文における誤りの発生と修正」全国大学国語教育学会要旨集　pp. 315-318
・石井健介(1996)「児童生徒作文の計量的分析の試み」学芸国語国文学 28　pp. 82-90
・江本明子(1980)「学校文集における児童作文の計量的考察」文教大学国文学 9　pp. 19-30
・国立国語研究所(1964)『小学生の言語能力の発達』明治図書
・白勢彩子・大澤千恵子・土屋晴裕・成家雅史・齋藤ひろみ・安部真治（2020)「児童作文の評価システムの構築－紹介文をテーマとしてー」第 44 回社会言語科学会研究大会
・土屋晴裕・成家雅史・安部真治・大澤千恵子・白勢彩子・中村和弘・齋藤ひろみ(2019)「児童作文の評価項目に関する予備的検討―紹介文に見る内容的観点と計量的観点―」全国大学国語教育学会要旨集　pp. 311-314
・野村雅昭・靏岡昭夫(1986)「小・中学生の作文の語彙調査」計量国語学 15-5　pp. 168-179
・土部弘・宝示重美(1996)「文章意識の発達（第３報)」大阪学芸大学紀要 C 教育科学 6　pp. 78-89